

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520328
 研究課題名（和文）女性ボクシングトレーナーによる「男性専用」動詞命令形の文脈に埋め込まれた機能
 研究課題名（英文）The situational meanings of so-called masculine directives in a Japanese boxing gym

研究代表者 岡田 みさを（OKADA MISAO）
 北星学園大学・経済学部・准教授
 研究者番号：90364215

研究成果の概要：最近の「言語とジェンダー」研究では、日本語のいわゆる「女性語」「男性語」の概念は、言語選択時のコンテキストから乖離した「規範意識」であるという批判が起こっている。本論では、この立場に立ち、日本国内のボクシングジムでの練習中に使用される、従来、「最も丁寧度が低く」(Smith 1992)、話者の性と直接結びつけられてきた動詞命令形の選択及びその機能を分析した。分析の結果、これらの言語形式の使用は、実際にはその場のボクシング対戦の状況や相互行為上の要請と深く関わっていることを示した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：談話研究、会話分析、言語とジェンダー、マルチモダリティ、男性語、動詞命令形

1. 研究開始当初の背景

(1) 伝統的な日本語言語学では、「まわれ」などの動詞命令形はいわゆる「男性語」であるとされてきた。動詞命令形は、日本語の指示を表す種々の言語形式中、「最も丁寧度が低い」(Smith 1992)とされ、それ故に職場において指導的立場にある女性はこれを避け別の指示表現を選択することが報告されてきた。

(2) しかし最近の言語とジェンダー研究では、いわゆる「男性語」の概念は言語選択時のコンテキストから乖離した、抽象的な「イ

デオロギー（ある言語選択をすべきだという意識）であり、日本語話者の言語使用の多様な実際を反映したものではないという批判が起こってきた。本研究はこの立場に立つ。

2. 研究の目的

(1) 日本女性の言語使用の実際の多様性を捉え直すために、これまで「普通の」女性の言語のモデルから「例外」としてあまり顧みられることのなかったスポーツ（ボクシング）指導に従事する女性コーチの言語使用を

分析する。

(2) 特にボクシング指導時に女性コーチによって使用される、これまで男性専用指示表現とされてきた動詞命令形(例:まわれ)に焦点をあて、どのような談話文脈で女性コーチがこれらの言語形式を選択するかを分析する。

(3) さらに、その談話文脈におけるこれらの動詞命令形を含む発話の機能は何か(その発話でどのような行動や話者のアイデンティティが創出され、それが共同参加者にどのように理解されているのか)を分析する。

(4) 分析を通じ、従来「最も丁寧度が低く」(Smith 1992) 話者の性と直接結びつけられ「男性語」と呼ばれて来た言語形式の選択及びその言語形式を含む発話の機能が、実際はその場の談話文脈に「埋め込まれている」(上野 1996) ことを示す。

3. 研究の方法

(1) 動詞命令形を含む発話の機能分析の方法として、会話分析(Coversation Analysis: Heritage and Atkinson 1984)における「シーケンス分析」を用いた。この分析方法では、ある発話の機能を特定する際に、参加者自身がその発話の次や、その次のポジションで当該発話をどのように解釈しているかを重要視する。このような、次のポジション、またその次のポジションという、当該発話に対する解釈が示されるシーケンスを時間軸に沿って分析していくことにより、「相互行為に会話参加者たちがどのように志向しているか」(Heritage 2005)を観察した。この方法論に基づいて、動詞命令形を含む発話が起こるシーケンスでどのようなことが起こっているのか(つまりどのようなシーケンス文脈で動詞命令形が起こっているのか)そのシーケンスにおける動詞命令形の機能(その発話で示されている行動や話者のアイデンティティ、またそれらが共同参加者にどのように理解されているのか)は何かを分析した。

(2) 動詞命令形を含む発話の機能分析の方法の二つ目として、「言語」のみならず「非言語行動」「モノの使用」を含む談話文脈を詳細に分析する「マルチモダリティ」の方法論(Goodwin 2000)を用いた。この方法論では、ある行動を示し、また相手の行動を理解するために、参加者は、その場のその場の様々な「言語」「非言語行動」「モノの使用(ミットの使用など)」などのリソースを、その場の相互行為上の要請などに基づいて選択的に参照していると考えられる。そして、参加者

によって参照されたそれらのリソースの総合体が、ある行動の提示、理解のための文脈を形成していると考えられる。上記のマルチモダリティの方法論に基づいて、動詞命令形を含む発話の使用文脈、及びそこでその発話が果たしている機能を分析した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果として、以下の考察を得た。

女性ボクシングコーチは、刻々と変化するボクサーの身体の動きなどに沿って動詞命令形の選択、非選択を行っていた。例えば、スパーリング練習(実際の試合を模した練習形態)において、その場のボクシングの状況からボクサーが相手の体の周りを即座にまわる必要のある状況が生じた。その際に、コーチは「動作の即時性を指示する」という意味で動詞命令形(例:まわれ)を使用していた。その一方で、始める際に動作の即時性が必要であった動きであっても、その同じ動きが進行し終盤にさしかかり、今度は動作の即時性でなくその動作を終了するタイミングを告げる必要が生じた状況があった。その際には動詞命令形でなく、動詞で形(例:まわって)が、「その動きをまだ続けるように」と指示するために使われていた。このように一つの動作内(例えば、相手の体の周りをまわる)においても、その時々状況に必要とされる要素(例えば、動作の即時性、動作終了のタイミング)に焦点をあてることと、動詞命令形その他の指示表現の選択、及びその機能は結びついていた。

これらの分析を通じて、従来、話者の性と直接結びつけられ、丁寧度が低く、いわゆる「男性語」とされていた動詞命令形は、その場の状況で焦点を当てる必要のある要素(例:動作の即時性)をボクサーに示すために使用されていることが明らかとなった。これらの言語の選択及びその機能を理解するためには、話者の性やその言語形式の字面の丁寧さだけでなく、これらの言語形式が起こる際のボクシング動作など、「マルチモダリティ」の観点から、その場の談話文脈を徹底的に分析しなければならないことがわかった。

(2) 成果の国内外における位置づけとインパクトとして、以下の点がある。

近年、日本語言語学において、従来、「丁寧に話す傾向がある」として一面的に捉えられて来た日本女性の言語使用は、実際には多様であることが示されてきた(Inoue 2006, Okamoto and Smith 2004)。本研究も、この研究の新しい動向の一つの例として位置づ

けられる。

本研究の成果では、従来、話者の性と直接結びつけられ、いわゆる「男性語」と呼ばれていた動詞命令形が、実際の会話の中ではその場の状況で焦点化されるべき要素（例えば、動作の即時性）をボクサーに示すために使用されていることを示した。この知見は、「私たちはどのような言語観をもつべきであるか」について、今後の研究の方向性に示唆を与える。私たちが言語を分析する際には、言語をそれ自体閉じられたシステムとして、会話のシークエンスや、文脈を形成する様々な言語、非言語、モノなどのマルチモダリティの文脈から切り離して観察することはできないのである。これらの文脈がその場その場の相互行為の中で参加者たちによって形成されるということを考えると、言語を相互行為と不可分に捉える必要性が出てくる。

この考え方は、近年、国際的にも、また日本国内においても研究が進みつつある、「相互行為と文法」(Ochs, Schegloff, and Thompson 1996, Hayashi 2004 など)という分野における言語観と近いと考えられる。「相互行為と文法」は、「言語にとっての『自然の生息環境』」である日常会話に焦点をあて、そこで参加者たちが産出する文法現象を詳細に考察する実証的研究である(林 2008)。そこでは、相互行為への参加の中で生じるコミュニケーション上の要請が言語や文法をいかに形作っているかを考察する(林 2008)。言語は相互行為の文脈から切り離すことができないという「言語観」において、本研究はこの分野と同じ流れにある。

日本女性の言語に対する規範意識(ある言語選択をすべきだという意識)について、Okamoto and Smith (2004)はその多様性を提唱している。本研究はそういった多様性を考察した初期の研究の一つとしての意義を持っている。例えば、規範意識の例として、Okamoto (1995)は、日本人女子大学生が親しい友人とインフォーマルな会話をしている際、動詞命令形を含むいわゆる「男性語」と呼ばれる言語形式を使用する際の意識を考察している。彼女らは、これらの言語形式を使用する際に、笑いや和らげ表現を同じ発話内で使っていたことから、Okamoto (1995)は、これらの動詞命令形使用は、彼女らの言語使用の規範意識を超えた有標(marked)な言語選択であると主張する。

これに対し、本研究の女性コーチの動詞命令形使用では、笑いや和らげ表現はその前後で用いられておらず、またその指示に対するボクサーの反応も、驚きのような反応を見せるわけでもなく、ただその指示に従おうとするというものであった。Okamoto (1995)の

知見を本研究に応用すると、ボクシングの動きに焦点をあてたボクサーとコーチの相互行為においては、女性コーチの動詞命令形使用はその場のボクシング動作に適した「普通」のこととして参加者自身が取り扱っており、このことから、これらの動詞命令形使用はこの場のボクシング(あるいはスポーツ)においては無標(unmarked)であると考えられる。このような分析から、本研究は、日本女性の規範意識の、実践の中での多様性を考察する研究の一例としての側面をもっていると考えられる。

欧米の研究においても、で述べた、実践の中における女性の規範意識の多様性を考察することの重要性が認識されている(Eckert and McConnell-Ginet 2003)。Eckert and McConnell-Ginet (2003)は、「どのような実践が特定のイデオロギーや規範を支えているのか」について今後研究が進められるべきであると述べる。本研究はその潮流に合ったものだといえる。

(3) 今後の展望

本研究で焦点をあてたボクシングコーチが、ボクシング練習以外の状況でどのような指示表現を選択しておりその機能は何かを考察することを今後の研究のテーマとしたい。そのことにより、その場その場の実践と言語選択、およびその機能がどのように関わっているかについてさらに考察する予定である。

本研究のデータ及びその方法論から派生した最近の研究に、マルチモダリティとインストラクション(あることを教え、それを理解する活動)の関わりを考察した岡田、柳町(2008)及び言語形式「はい」の相互行為中における機能を考察した岡田(2009)がある。これらの研究の要旨は以下の通りである。今後もこれらの、相互行為中における理解の達成、及び相互行為における言語形式の役割というテーマについて考察を深めたい。

まず、岡田、柳町(2008)では、本研究データのボクシングジムと、本科研の連携研究者(柳町智治)所有のデータである大学院理科系実験室における特定の文脈において、指示がどのように新参者(例えば、ボクシングジムにおけるボクサーや、理科系実験室における大学院生)に示され理解されているか、またそれを通じてインストラクションという活動がどのように組織化されるかを、本研究の方法論であるところのシークエンス分析、マルチモダリティ分析の観点から微視的に考察した。具体的には、C. Goodwin (2003など)に基づいて、お互いに相手を見ることのできる(または相手と同じモノを見ること

ができる)状況にいるかどうか、指示を提示し理解するためのリソース(例えば視線、体の姿勢)の選択、及び、インストラクションのシークエンスの軌跡に影響を与えることを示した。お互いに相手を見ることのできる状況(大学院理科系実験室における実験場面)では、指示を提示し理解の際に参加者たちは視線や身体動作を用いていた。また、新参者(大学院生)が指示に適切に反応しなかった場合は、その反応の次の位置で、指示を出した話者による、指示の出し直しが行われた。

これに対して、お互いを見ることが出来ない状況(ボクシングジムにおけるスパーリング練習。指示を出すコーチはボクサーを見ることができ、ボクサーは対戦相手と対峙しているため、コーチを見ることができない)では、コーチは指示を出す際には自分の視線や身体動作は使えなかった。さらに新参者(ボクサー)が自分の指示に適切に反応できなかった場合であっても、ボクシングの対戦の流れによっては、その不適切な反応の次の位置でコーチが訂正を行わない場合があった。ボクシングのデータでは対戦をしていることから、当該の指示が必要な文脈からそうでない文脈へと、より速い速度で文脈が更新されているといえる(この文脈の考え方は Goodwin (2000) を応用したものである)。

人が教え学ぶということは従来、個人間の情報の受け渡しであると考えられてきた。しかし本研究では、お互いの行為の提示、理解は、参加者の相互行為の中で達成されるものであることを示した。

次に岡田(2009)では、本科研のデータを使用し、本科研と同じ方法論であるところのシークエンス分析とマルチモダリティ分析、それに加え参加者がどのようにその場の活動に志向しているかという「参加」の概念に基づいて、「はい」が冒頭に来る発話が、その前後または同時に起こる非言語やモノの使用と並置されて、どのような行動を表しているかを考察した。「はい」は、「はい、まわるよ」のように、次の動作を始めるよう指示する際によく用いられていたが、新しい動作を始める際であっても「はい」が用いられていない場合もあった。この観察を出発点として、どのような状況で「はい」が使われ、どのような状況で「はい」が使われていないかを分析した。

その結果、指示を受けるボクサーが2つの活動に志向している場合(例えば、ボクサーがコーチの口頭指示を受けながら、相手ボクサーと対戦している状況)に、新しい動作を始めるにあたって「はい」が用いられていることが明らかとなった。これに対して、指示を受けるボクサーが1つの活動に専念している場合(例えば、コーチの口頭指示を聞く)

では、新しい動作を始めるにあたって「はい」が用いられず、「で最後」のような別の言語形式が用いられていた。

このような分析から、従来、個人の心内の「情報処理」の観点から分析されてきた言語形式「はい」の選択が、実際には、その瞬間の活動への志向といった、相互行為的な要素にも影響を受けていることがわかった。

以上のような、相互行為の中における理解の達成、及びそこにおける言語形式の役割について今後も分析を進める予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

岡田みさを、柳町智治 2008 インストラクションの組織化 -マルチモダリティと「共同注意」の観点から、社会言語科学 11 -1、139~150、査読有

Okada, Misao 2006 Speaker's sex or discourse activities? A micro-discourse based account of usage of nonparticle questions in Japanese, Language in Society 35 -3, 341~365、査読有

[学会発表](計 4 件)

Yanagimachi, Tomoharu & Okada, Misao 2008, What are L2 speakers learning in natural conversations, an L2 or a "professional vision"? 2008 年第 15 回国際応用言語学会 (AILA 2008)、2008 年 8 月 28 日、エッセン(ドイツ)

岡田みさを、西阪仰、酒井信一郎、是永論、五十嵐素子、水川喜文、柳町智治 2007、ワークショップ「インストラクション場面における『職業的/専門的な見方』とその組織化の様相」第 20 回社会言語科学会研究大会、2007 年 9 月 16 日、関西学院大学

Okada, Misao & Yanagimachi, Tomoharu 2007, Second-language learning as learning what to see in contextual environment、17th International Conference on Pragmatics & Language Learning、2007 年 3 月 27 日、米国ハワイ大学マノア校

Okada, Misao 2006 The situational meanings of so-called 'masculine' directives by a female boxing trainer in Japanese conversation, 2006 年日本

語教育国際大会 (ICJLE)、2006年8月5日、米国コロンビア大学(ニューヨーク)

〔図書〕(計 3 件)

小林ミナ、日比谷潤子編(水谷修監修、著者名:小林ミナ、日比谷潤子、小野正樹、名嶋義直、岡田みさを、坂口和寛、山田敏弘) 2009、「日本語教育の過去・現在・未来」第5巻「文法」, 凡人社、1-212、第3部第5章 岡田みさを「活動に埋め込まれた「はい」使用-リソースの組み合わせの中の言語形式」を担当。

Junko Mori, Amy Snyder Ohta 編

(著者名: Tsuyoshi Ono and Kimberly Jones, Junko Mori and Kanae Nakamura, Haruko Minegishi Cook, Patricia J. Wetzel, Shigeko Okamoto, Misao Okada, Yoshiko Matsumoto, Amy Snyder Ohta, Lindsay Amthor Yotsukura, Yasuko Kanno, Dina Rudolph Yoshimi, Ryuko Kubota), 2008、「Japanese Applied Linguistics: Discourse and social perspectives」, Continuum, 1-364、第6章 Misao Okada「When the coach is a woman: the situational meanings of so-called masculine directives in a Japanese boxing gym」を担当

上野直樹、ソーヤーりえこ編(著者名: 上野直樹、ソーヤーりえこ、柳町智治、岡田みさを) 2006、「文化と状況的学習-実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン」, 凡人社、1-224、第6章 岡田みさを「リソースの組み合わせとしてのインタラクション: 『アクションの理論』による終助詞『ね』の分析」を担当

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 みさを (OKADA MISA0)
北星学園大学・経済学部・准教授
研究者番号: 9 0 3 6 4 2 1 5

(2) 研究分担者

ありません。

(3) 連携研究者

柳町 智治 (YANAGIMACHI TOMOHARU)
北海道大学・留学生センター・教授
研究者番号: 6 0 3 0 1 9 2 5